

ツイノベまとめ



みずきあかね

空と水面の世界を歌いながら歩いていると、オルゴールの音。
ああ彼よ。透明で滑らかな硝子の彼。
私も彼のように綺麗な存在になりたかったわ。
でも会えて嬉しいと思ったところで目が覚めた。
扉がある廃墟は朝の光で満ちていたけど私の心は向こうに置き去りのまま、まだ歌い続けている。

※

私は深海魚よ。ゆっくり暗い海底を泳ぐの。
ねっとりとした水は温かくて水を掻く度に筋が出来るの。
でもあなたに会うときだけ水面に顔を出すわ。ゆっくりゆっくり。
あなたの足の親指から腰骨、背骨の一つ一つ、それに鎖骨にキスをするの。
そしておはようのかわりに言うの。好きって。

※

ああチョコレート！ 飽きるほど食りたいと思って板チョコを3枚買った。
おやつまで我慢すれば、空腹が助けてチョコがもっとおいしくなるに違いないがそろそろ限界だ。
時計は14時50分。
俺は机の上のチョコレートを手にして愕然とした。
中身がなかった。
「姉ちゃん！」姉は高笑い。

※

温泉旅行の二日目。
部屋付きの温泉につかって朝の光をぼんやり見ている。
脱ぐとき見つけた首筋の跡を思い出してのぼせてしまいそう。
あんなに嫌がって強がってみせても手品のように翻弄されて、自分が女だったんだと思い知らされて、どんな顔をしたらいいのか……。
彼はまだ夢の中。

※

朝ラッシュの時間でも第3セクターの田舎電車には立っている乗客がない。

私も座って今日の予定を確認していたら目の前に車掌が来て

「今日も一日元気お元気で」

と胸ポケットから手品宜しく小さな花束を出した。

周りは拍手喝采。

途惑いつつ受け取ると車掌の笑顔にうっかりときめいた。

夜、一人眠れず物思いに耽っていたら、同室の片瀬が突然大きな声でわめいた後がぱっと起きた。汗だくの奴にタオルを投げて聞くと、クッキーが自分を食べろと迫ってくる夢を見たと言う。

「食えばいいじゃん？」

「顔が先輩そっくりだったんですが、食べてよかったですか？」

って迫るな！

※

昨夜あなた好きにされてズタボロになった私を抱きしめてくれたね。

殴られても抱きしめられてもあなたのこと好きよ。

出発を告げる朝日も目覚まし時計も嫌い。

冷えたベッドで待ち続けるのは辛いわ。早く帰ってきて。

と、クッションに懇願される夢を見た。

彼女を作れって神の掲示か？

※

小さい君は湯たんぽみたい。

後ろから抱くとすっぽりと収まってぬくい髪から花の香りがする。

「ねえ、何かあった？」

心配させちゃったかな？

「先輩に告白された」

「ふーん」

ってそれだけ？ でも素っ気ない返事が君らしい。

放課後の教室は日が陰って寒いけど、一緒にいるから温かいね。

※

バイトの帰り道、姉に会った。

その薬指にはダイヤが輝いている。

存在感ありすぎと思った時、姉が星空を指した。

指先の向こうには青く白く変化しながら輝くシリウス。

「あれ頂戴」

星を取ってこいて？ 相変わらず欲深い。

「出来ないならこれでいいよ」

と頬にキスされた。

……畜生。

※

この神社には嫌と言うほど思い出がある。

覚えてないけどお宮参りと七五三はここだった。

初詣も節分の豆まきもここ。受験の時は親と合格祈願に来たなあ。

「ここで式を挙げるのもいい？」

と言ったら、彼女は

「そういうのもいいね」

と笑うんだ。あんまり可愛くて僕は彼女を抱きしめた。

※

ホテルの部屋から交差点で待つ人を見ていたら、自分が知っている星座の形になった。

信号がかわったら星達は水族館の鰯のような群れに消えたけどね。

星座の世界では神様が恋をして嫉妬して愛し合う。

じゃあ私も一緒だわ。

ふり向けばベッドに愛しい人とあの女の寝顔。

もう動かないけど。

グラウンドでサッカー部の朝練を見てた。
バレンタインの予行練習で焼いたチョコクッキー。
きっと本番も渡せないから君を見ながら食べてしまおう。
クッキーの袋を開けた途端
「もらい！」
と横から手が出て一つつまんだ。
「うまいよこれ。手作り？」
「...うん」
君のためと言えなかった。

※

深夜彼の電話に腹を立てたら、
「お姉さん鬼になるよ」
鳥居の根本の男が声をかけられてはっとした。
私の手に釘と金槌、足は裸足のまま。
「お参りするならこっちだよ」
男は私を社の前に立たせると私のコートから彼の部屋の鍵を出して賽銭箱に投げて
「幸せになれ」と拝んだ。
泣いた。

※

上司の屋敷が夜中に崩れたと聞いて見舞いに来た誠之助は震えた。
美しいと評判の屋敷が廃墟のようになっていたのだ。
その時、崩れた屋敷から着物を着た狐が出てきた。
腰のキセルは最近上司が強引に手に入れたと自慢の一品だ。奴は狐から奪ったのか。
狐は満足げにコンと鳴いて消えた。

※

廊下のカーテンを開け、えいやと窓を開けると寒くて震えた。
見上げれば雲一つない空。
今日も一日晴れるだろう。

洗濯も掃除も布団干しだってやりたい放題の天気。
でもぴしゃりと窓を閉めて鍵を閉めた。
足下にすり寄ってきた猫を抱っこしてにんまり笑う。
今日もコタツムリでいこう。

※

駅のホームは寒々と凍えている人たちでいっぱいだった。
息は吐く度に白く凍っては朝日に輝いて幻想的だ。
次の電車に乗れば学校にたどり着く。
しかし瞬間から始まった幻想は広がり、甘い蜜に足を取られて引きずりもどされた。
足先が冷える。
時計は午前7時半。夢に騙されて今日も遅刻。

※

家庭教師先の生徒の姉は美人だ。
いつも紅茶と手作りクッキーを出してくれる。
今日もワクワク姉の登場を待ったが来ない。
トイレに行くふりをして部屋を出て彼女を探すと廊下で誰かとキスをしていた。
なんだ彼氏いたのか。
しかし寄り添っているはずの影は彼女のものだけだった。

時計は15時、おやつを食べようと思ってたら窓から赤鬼が入ってきた。
急いで台所に逃げて炒り豆を探したけどない。
小豆や金時豆を投げたけど全然逃げない。
大豆だからと冷蔵庫から納豆を出して投げたら、鬼は臭そうに逃げた。
畳の上は納豆だらけ。後で鬼と化した母さんに怒られた。

※

節分が終わり立春。
幸せになると言って家を出た嫁から連絡はない。
バレンタイン売り場を横目に弁当を買い、テレビを相手に食べて寝た。
深夜床の上に何か置かれる感じて目を開けると嫁が恥ずかしそうに立っていた。
床の上の板チョコには「ごめん」の文字。
「許す」
と彼女にキスをした。

※

「月が綺麗ですよ」
誘われるままに庭に出た。
天上の月光は体の隅々まで透明にしていくようで心許ない。
庭の隅には先日の雪が少しだけ白く輝いているけどもう消えてしまう。
儚さが切なくて涙が一粒頬を伝った。
でも彼が唇で涙をとめてくれたから微笑むことができた。
「月、綺麗ね」

※

「月、綺麗！」
「あんまり遠くに行くなよ」
と呼び掛けたが無視された。
月の重力がいくら小さくても追いかけるのは億劫だ。
いつも地球から見上げているから気持ちはわかるがな。
奮発して月旅行に来たかいがあった。
その時黒い空間に青いビー玉が浮かんで娘が叫んだ。

「地球、綺麗！」

※

早朝床の上から天井の染みを見ていたら、そこから何かが出てきた。
慌てて起きるとそれはベッドに落ちた。

「ふぎゅ！」

小さい女の子だ。

「何お前」

おでこの赤い跡をさすり

「悪魔です」

等と言う。

「お兄ちゃんイイことする？」

まさに悪魔の微笑み

「だが断る」

俺はお姉さんの方がいい！

※

呼び出されて行った校舎裏には友人がフリルで覆われたお姫様ドレスを纏ってモジモジしていた。

劇でもコスプレ会場に行くわけでもない。

自分が一番自信がある私服で好きな男に告白したいという。

その後必死の説得も聞かず境界線越えちゃった友人（男）がふられるのを生温かく見学した。

※

雨の境界線はどこだろう。

君がいる町ではまだ雨は降ってないんだね。

傘からしたたり落ちる雫を見つめながら携帯を閉じた。

去年までは二人だった帰り道、今年は君が卒業して一人。

孤独に思ったことはないがこんな雨の日は堪える。

だから今度会える時は雨がいい。

一つの傘で家に帰ろう。

雨男と雨女が結婚式を挙げたのは雨ではなく視界不良な大雪の神社だった。
美しい白無垢の花嫁との誓いもそっちのけで雨男は
「一生に一度の新婚旅行は晴れで」
と神頼み。
しかし大雪で飛行機が飛ばず新婚旅行は中止。
雨男は落胆したが雨女は笑って、
「計画通り」
とベッドに誘う。

※

遠くで下宿している先輩に会いたくて旅行ついでに泊まりに行った。友達が
「赤の他人の男んちに泊まり？大丈夫？」
等と言うが胸元に谷間もできない私が襲われるなんてないない！
久しぶりに先輩とお酒飲んでごろ寝した。あー楽しかった！
帰ってから友達に「鬼や」と散々言われたのは何故。

※

晩ご飯が出来るまでベッドの上で本を読み耽っていたら、携帯が震えた。
浅川さんからのメールは明日の時間割についてだ。
調べて返信すると見ていて恥ずかしくなるくらいのデコメールが返ってきた。
こういうメールを出すような可愛げのある女の子だったらふられなかったかもと舌打ち。

※

夕日が白いシーツを朱く染めていく。
彼女の白い肌も朱に染まる。
試験中の憂さを晴らすために口紅を鞆に滑らせたところを見た俺は、口止め料と称して彼女と
何度も寝た。
出会いは最悪だが今は私の大切な……
「先生、ごめん。好きな人が出来たの」
甘い声と共に俺の首にロープがかけられた。

※

まっ暗な部屋の中で目を覚ました。

時計を見ると4時。

もう一度寝るかと思ったその時、薄い闇の中に二つの目玉を見つけた。

黒豹だ。夢の中から追いかけてきたのか。

逃げなければ。靴はどこだ。

生臭い息で近づいてくる赤い口。そこから伸びる長い舌でざらりと舐められた。

...にゃんこか！

※

バレンタインの放課後、電車はピンク色の空気に包まれていた。

俺も彼女からポッキーゲームを強いられてる。

「次だよ」

一口かじって彼女の顔が少し近づいた。

このまましても今日は何も言われないうらさうけど口はなあ。

ポッキーが刺さった口をよけて赤い彼女の頬にキスしたら怒られた。

なんで？

※

放課後いつもの電車で知也とゲームの話をしながら帰る。

電車の中は昨日と違った。

女子の雰囲気違って熱い視線を感じたのはバレンタインのせいかな。

知也の鞆はチョコで満杯。何で知也だけ？と思ったら

「これお前に」

知也が笑顔で差し出したチョコにはデカデカと俺の名前が書いてあった。

※

2月14日があと5分で終わる。

駅のホームはまだたくさんの方が乗ったり降りたりしていて、その中で君を見つけることが出来たのは奇跡じゃないかと思う。

選り抜いた菓子を差し出し君に告白するのは相当の勇気だった。

「それで答えは？」

と君に聞いたら

「知ってるくせに」

と微笑んだ。

まっ暗な中で唯一明かりが付いているラーメンの屋台で一杯注文してため息。
黙って部屋を出てきた私も大人げないが温泉まで来て浮気を疑う奴が悪い！
出てきたラーメンは昔風の醤油。箸つけようとしたら彼がのれんを上げて
「もう帰ったかと...」
と泣きじゃくった。
この顔ちょっと好き。

※

キッチンカウンターで朝を迎えてしまった。
酔っ払って帰ってきてそのまま寝てしまったらしい。
ぎくしゃくする体をほぐしていると星座をモチーフにしたメモを見つけた。
「お仕事ご苦労さま」
たどたどしい文字は娘の物だ。
「愛されてるなあ」
苦笑しつつ立ち上がった。
今日も頑張ろう。

※

帰り道後輩の女の子に
「ちょっと来て」
神社に連れて行かれた。
めちゃ寒いのになかなか口を開かない。
足先がじんじんしてきたから帰ろうと思ったらピンク色の袋を俺に押しつけ
「好きです」
その顔が可愛かったとビールのつまみにしてたら叱られた。
一緒に幸せになったからいいだろ？

※

悲しいのは自分の所業が枷になり自らを認められないことだ。
そう言うと道先案内人は微笑んだ。
ごらんなさい空を。
あれは誰が見ていなくてもあのように優しいのです。

あなたも誰かの空なのですよと。
私の瞳に映るのは曇天。暫く晴れ間は望めない。
それでも優しい青空になれるだろうか。

※

彼女と二人度旅、ホテルで「最上階のラウンジで飲もう」と言われた。
外が見えるエレベーターは高所恐怖症の俺を容赦なく苦しめる。
「夜景がキレイね」
そんな物を見る余裕はない。カクテルを飲んで緊張の糸が切れたらしく気がついたら朝。 帰りのエレベーターも硬直し結局喧嘩別れした。

※

言葉を花にして花束を作る。
柔らかな和紙やリボンで飾ってHPに並べると見る人は
「ステキね」
と言ってくれてうれしかったけどネタ切れだわ。
朝靄に煙る街をベランダから見下ろしていたら、歩いていたカップルが急に抱き合った。
お！ そのシュチュいいね！ 私は再びPCの前に座った。

※

夜の病院はなんだか怖い。
早くそこを通り過ぎようと自転車のペダルを勢いよく漕いだら、花束を持った女の子が泣きじゃくっているのに気がついた。
関係ないと横断歩道を渡ろうとした途端車にはねられ、その病院に入院。
入院中看護婦にその子は「病院の福の神」だと聞いた。
どこがじゃ！

※

大事な皿を割った夫と喧嘩。
部屋を飛び出し地下室に隠れたけど出られなくなった。
鍵壊れてたんだ。

風一つない部屋は息苦しくてまっ暗。

心細いけど夫を許せなくて埃っぽい椅子にもたれて寝てしまった。

目が覚めると夫が目の前にいて思わず抱き合った。

「許してくれる？」

許しません！

昨日の手品のテレビの話をしつつ竹内と電車を待っていた。

向こうのホームに同じクラスの浅岡を見つけて手を振ったが、奴は来た電車に乗って行ってしまった。

学校に行くと浅岡は家出したと知らされた。

俺もサボりたかったのに裏切りやがって。

外は曇天やがて雪。

お前は今どこにいる？

※

花束を持って夕日で光る病室の扉を開いた。

彼はベッドの上から氷の様な目で俺を一瞥して再びカルテに目を落とした。

それで怯む俺ではない。

「成仏の時間ですよ」

彼はやっと顔を上げ「まだだ」と駄々をこねる。

私は花束を変化させた鎌を振り上げた。

向こうの患者も宜しくな。ドクター。

※

よく来た公園の散歩道。

小さな布製の赤い靴で誇らしく歩いて行く君は大きな犬とすれ違うたびびっくりして私の足にしがみついて泣いたね。

言うことを聞かなくてお仕置きで出したベランダで泣かせたこともあったけど、私も辛かったわ。

背が追い越されて悔しいけど卒業する君にエールを。

※

節分が終わり立春。

幸せになると言って家を出た嫁から連絡はない。

バレンタイン売り場を横目に弁当を買い、テレビを相手に食べて寝た。

深夜床の上に何か置かれる感じて目を開けると嫁が恥ずかしそうに立っていた。

床の上の板チョコには「ごめん」の文字。

「許す」

と彼女にキスをした。

※

夜中の病院で男は私を見すくめた。

「恐くないよ？」

と言われて私は黙った。

男は笑うがその顔も引きつって怖い。青いカーテンの向こうに逃げたい。

白衣の天使は側で緊張した面持ちで私達を見ていた。「やはり私が」と渡さないでくれたらよかったのに。

新米の医者注射器を持たすな！

※

家の地下室に女の子が座っていた。両親は見えないらしいその子と内緒の友達になった。十歳の誕生日の朝。女の子はそっと立ち上がり

「若様も大きゅうなりましたね」

と泣いた。何故と聞くと

「若様を食べてしまう。さようなら」

微笑みながら消えた。

彼女の額には小さな角が生えていた。

※

畳が臭い。

昨夜ラーメンをコタツまで持って行く間に畳にぶちまけたからだ。

ちゃんと拭いたはずだが今畳ととんこつスープの臭いが相まって鼻の奥を攻撃する。

「俺が悪かった！」

と土下座で叫んでも妻は浮気した俺をなかなか許してくれない。

場所を選べばよかった。

畳が臭い

娘のお雛様は四段飾りで出すのも大変だが私のお雛様は手のひらサイズ。
結婚して初めてのひな祭りに買った陶器のお内裏様とお雛様とぼんぼりのセット。
引き出しの奥から久しぶりに出してテレビの前に飾ってみてあれ？と思った。
こんなお顔だったかしら。
今の主人と私によく似てる。

※

朝早く部屋を出て港に向かった。
子供は戸惑う瞳で車窓を見ている。
自問自答は幼い子供に会って暫く続いたが、馬鹿馬鹿しくなりやめた。
これで私は兵士斡旋の仕事無くし子供は家族と仕事を失う。
平和の国への脱出はこの国への裏切りとなり二人とも追われる身となる。
それでも俺は。

※

昼間の水族館は思ったよりも空いていた。
ぼんやりと水槽の中の魚を眺めていたら、
「どこ行ってたの!？」
と悲痛な声。ふり向けば親子がひしっと抱き合っていた。
「ごめんなさい〜！」
小さな子どもはお母さんにすがりついて泣いて、なんだか心が温かくなった。
思わぬ昼間のプレゼント。

※

隣の部屋で寝息を立てているのはたまに「泊めてくれ」とやってくる無神経なヤツ。
しばらくして寝ぼけながら部屋から這い出してきたヤツに牛乳のカップを渡す。
「俺出るからはやく目を覚ませボケ」
と言え
「ありがとう」
ってめっちゃかわいく微笑む。
今度来たら絶対襲ってやる。

※

深夜先輩に呼び出された。

ホテルのロビーに現れた彼の右手にはひっかき傷,シた後みたいに気怠そうでうるんだ瞳で艶っぽく笑う。

この笑顔にみんな騙される。

「またふられた？」

言った途端に堤防決壊。

「何が悪かったのかな。今度三人でしようって言っただけなのに」

...普通に引くわ。

※

難破船から財宝が見つかったニュースを見てたら親父が電波塔付近にお宝があると言って地図をくれた。

僕は友達とシャベルを持って集合し地図を頼りに掘ってみた。

がつんという手応えに俺達は興奮しつつ何故かお菓子の缶を掘り当てた。

開けたら親父達の子供の頃の写真が入っていた。

※

早朝、家族に知られる前に捨てようと公園のゴミ捨て場に向かった。

警ら中の警官がすれ違いざま白い手袋で俺の肩を叩き

「何してるの？」

言った途端顔が凍り付く。俺でも凍るわ。

「食えるから持ってけ」

と先輩に押しつけられたゴミ袋の中には解剖後の牛の腸がにゆるっと入っていた。

深夜コンビニでバイトしていると年配の男がお菓子売り場の陳列棚を凝視していた。
やがて男はチョコの箱をレジに置いた。
男は財布を出した時汚れた紙が落ちた。
幼い字で「お父さん大好き」の文字。
男は暫し物思いに耽っているようだったが紙をポケットに入れ商品を受け取り出て行った。

※

拾った絵本には真夜中の遊園地が幻想的に描かれていた。
主人公は迷子の女の子。
次のページでオバケが出てきて「オバケの世界へご招待」と女の子をオバケの国に連れて行ってしまふ。
私も最初はこうだったな。
肩をたたかれてふり向くと狼男がいた。
「さびしい？」
「全然。遊ぼ！」

※

「扉の向こうには美しい世界が広がってるんだよ。一緒に行こう」
彼の言葉に動悸が速くなる。
外に出てはいけないのに蜜のように甘い言葉に誰が抗えよう。
私は彼に導かれるまま地下室を出た。外は満月の光で美しい。
「ほら、きれいだろ」
とても綺麗ね、あなたののど笛。噛み付きたい。

※

「その手を放せよ」
低い声で牽制したが彼女は聞かず馬乗りになって男の顔を殴り続けた。
「こいつが悪いんだ。お前のこと悪く言うから」
「もういいから」
相手が死ぬだろうが。彼女の手を掴み赤く腫れた拳に唇を寄せた。
彼女は馬乗りのまま口をぽかんと開けて硬直した。
これ、効くなあ。

※

彼と喧嘩した腹いせに一人で映画館に来たら女連れの彼と鉢合わせした。

「こんばんは」

と声をかけたら

「彼女同じ会社の子でどうしても映画が見たいって」

って焦った声。

出会った頃なら手錠をかけてでも連行しようと思っただろうけど何度も浮気された後だから許してあげる。

「バイバイ」

※

朝の歩道橋で向こうから来る女の子に気がついた。

以前妹とお人形遊びをにしていた子だ。

歩きながら本を読み耽るその子はあの頃と同じように髪を二つに結んでいてそれが妙に可愛かった。

声をかけようか迷ってたら笑顔で

「お兄さんおはよう」

と挨拶してくれた。うっかり萌えた。

※

僕を見て。

床の上に寝転がって君を見ているでしょ？

おなかを撫でてもいいよ。

撫でてくれたら鳴いて足にすりすりするよ。

今日の君は草と土と血のにおいがする。いいにおいだね。

だからおなかを撫でていいよ。

こっちを向いて。

物思いに耽って涙を流さないで。

ほら、滑稽な僕を見て。

彼女は隣の席にいる僕の存在に気付かない。
だから数学のノートに彼女の横顔を落書きした。
でも絵の彼女は僕の方を向かない。
悔しくて正面の顔を描いてみた。ノートの彼女は僕を見つめてくれて照れた。
想いは見えないけど電波のように飛ぶことがある。だから彼女に飛ばす。
「好きだよ」

※

宇宙から届く電波を受信するように、誰かが私のことを好きと想ってくれるといいなと現実離れする数学の授業中。
なんとなく隣を見たら佐伯が慌てて下を見た。
いつも授業以外無関心な奴がなにやってんだろうと思ってノートを覗いたら女の子の顔。
髪型、私に似てる。
うそどうしよう……

※

横を見たら彼女が僕のノートを見ていて慌てて隠した。気付かれたかな？
放課後美術部の先輩に相談したら、
「大体、何も言わずに気付いてもらおうなんてのはずるい」
と言われて困った。
「言えないなら手紙でも書けば？ 結構くるものあるわよ」
女の先輩のアドバイスに僕は頷いた。

※

佐伯のノートの絵、私と似てた。
夜ベッドで寝転んでたら思い出した。
佐伯は男のくせにまつげ長くて線も細くて顔が白くて、水泳部で肩幅がっちりの私と大違い。
こんな私のこと好きだったりするのかな？
それって……困る。だって不釣り合いだし。私のタイプじゃないし。
でも頬が熱い。

※

寝不足だ。

彼女に渡す手紙を書いていたけど、全然うまくいなくて、自分に腹が立った。

何度も書いて消して書いて破ってを繰り返して、気がついたら朝だった。

ノートの端に書いた彼女の顔が一番気持ちが入っているかもしれない。

渡そう。

受け取ってくれても、そうでなくてもいいから。

※

国語の授業中。隣の佐伯から手紙が来た。

そっと開くと私の顔があった。

横顔と正面。それと「つきあってください」の文字。

ちょ、ちょっとまで、気は確かか私！ こんなストーカーめいたことされてもめっちゃうれしい

。

横を見たら佐伯は窓の外を見ていた。白い雲が気持ちよく流れていく。

※

「放課後、校舎裏」

ノートの端を破った脅迫文が来た。

.....やっぱり届きませんでした。か。

どこか冷めた気持ちになった放課後、校舎裏に行ってみると、彼女が仁王立ちになっていた。

「佐伯さあ、あの手紙って.....」

言いにくそうな顔が可愛くて思わず

「すきなんだ」

と言ってしまった。

※

生まれて初めて男子に好きとか言われてぽかんと口が開いてしまった。

え〜この場合どうすりゃいいんだ。

佐伯の奴私を真っ直ぐ見てる。

私の似顔絵はすごく可愛く描かれていて、それが佐伯から見た自分だと思うとなんだか申し訳
なかった。

だから

「私でいいの？」

と言ってしまった。

※

「私でいいの？」って言われて即答できなかった。

「君がいい」って言えばいいのか、それとも傷つけまいと考えた末の断り文句なのか。

でも僕が好きなのは彼女で、他の人は考えられない。僕は頷いて答えた。

すると彼女はその場にいきなり座り込んで、

「緊張した！」

って笑った。

※

告白されてドキドキが止まらなくて、あーもう

「緊張した！」

思わず言っちゃったら、佐伯も笑って座ると視線を合わせてきた。

これ以上私の心臓を酷使しないでよ。

それなのに佐伯はとびきりの笑顔で言うんだ。

「届いてよかった」

って。

うん。届いたよ。

佐伯の気持ち。ありがとう。

※

届いた想いは彼女を変えてくれた。

目が合うと笑ってくれるし、放課後も一緒に帰るようになった。

夜、ノートの端に彼女の顔を描いてみた。

愛おしくて好きで好きで好きで、思わず彼女の顔にキスをした。

いつかホントにキスできますように。なんて思いながら。 （今日はキスの日☆）

夜中に電話して、迷惑だったかな。でもどうしても声が聞きたかった。

仕事でちょっとしたミスをした帰り道、思わず電話してしまった。聞きながら花を贈った時の笑顔を思い出したら少し笑顔になった。

坂道を上って家の前に誰かいた。

「遅い！」

ふくれっ面の君は僕を甘やかす。

※

遅刻するからって朝飯抜かすんじゃないかった。

超空腹な中休み、雲から差す光のように机の上にパンがそっと置かれた。おお～！

「武士の情けじゃ」

の声に顔を上げれば学級委員長。

「ありがたき幸せ」

とひれ伏し、早速食べようと手に取ったら、食品サンプルだった。orz あんまりだ！

※

夕方の長く伸びる影が、あなたの足下に届いた。

夕日は背中を照らしていて少し熱いから、顔が赤くてもきっとわからないね。

愛がどんな形をしてるかわからないけど、好きという気持ちはわかる。

電波塔からのびる長い電線みたいに、私の気持ちも赤いリボンになって、あなたに届くとい

い。

※

図書館で本を探している人を助けるのは司書の仕事。

「何かお探しですか？」

「昔の道具の本を」

と言う男の子に本を探した。

「この本が読みやすいですよ」

「ありがと」

男の子は笑った。見つかってよかったってふり向くと使い魔の罫にはまり何も無いところこけた。

覚えてるヨハン！

※

早朝、隣で眠る君の涙声で起こされた。あれっと思っているうちにぎゅって抱きしめられた。
最近できた彼とまた喧嘩したのかな？
ちょっと前に連れてきた男を思い出して、僕は君の頬を舐めた。しょっぱいね。
大丈夫あの人なら。君を愛しているから。
君も愛され上手にならなくちゃ。

※

「はやく！」

坂の上に学校を作った奴を呪いながら、荒い息で坂道を登る路面は濡れていて滑りそうなのに、君は軽やかに走っていく。
追いかけてようやくたどり着いた高台の学校の校門で、彼女は空を指を指し微笑んだ。
視界に広がる大きな虹。

新品の制服に袖を通した4月。

慣れない通学路を一人歩くのは心細かったから、友達を作ろうと思った。

でも声をかけても無視されることが多くて悲しかった。

夏服に替わる今日、

「おはよう！」

って挨拶したら、友達が「おはよう」って返してくれた。

朝の光にその笑顔が眩しいよ。

※

子どもの頃、金木犀の花と水を空き瓶に詰めて香水として遊んだ。

子どもはどんなものでも作る可能性のかたまりだ。

庭の花の残骸を前に涙目になっている娘に目線を合わせてみた。

「花びらごはんなの」

「おいしそうね」

と食べるふりをした。娘はうれしそうに笑い声を上げて庭を跳ね回る。

※

あいつの部屋に入ると猫が足下にすり寄ってきた。

手触りで毛並みに栄養が行き届いているのがわかる。

「ご主人様は暫く入院だから俺と暮らすか？」

猫は俺のズボンに爪を立て「否」と鳴いて行ってしまった。

操の固いことで。

悪気なしでも他の女に手を出した飼い主とは大違いだな。

※

「あなたがいけないのよ」

曇天の空の下、彼女は涙声でそう言うとナイフを俺の腹に刺した。

女の嫉妬っておっかないと思いながらその熱さと痛さに気を失った。

気がついたら病院のベッドの上で、親友が枕元にいた。

「猫にふられたよ」

親友の苦笑に俺も苦笑。早く帰って撫でてやろう。

※

昼休み、弁当を食べようと蓋を開けてその白さに呆然とした。

何でご飯だけ？

気がつかないうちに母の機嫌を損ねるようなことをしたらしい。

どうやって謝るべきかそれとも無関心を装うか悩んでいると携帯が鳴り絵文字踊るメールに思わず涙した。

「ごめんね、お父さんのとまちがえたわ」

※

西日が当たる下宿は夕方になると殺人的高温となるため、窓は全開だ。

強風の扇風機を独占している彼女は僕の肩に手をかけて

「アイス食べたいな」

とおねだりした。

薄着の胸元を直視しないように

「まだだめ」

とレポートの続きをしながら、開いたままの窓と夏の暑さを心底憎らしく思った。

※

「お前なまいき」

上から目線で嘲笑う彼は私の小さなプライドを引き裂いていく。

ある日不幸なことに帰りが一緒になった。

どうやりすごそうと思っていたら彼が私の手を掴んで引き寄せ突然の抱擁。

直後ギリギリに車が走り去る。

「あぶないやろが！」

彼の必死の顔に胸の奥が甘くうずいた。

夜の海に足を浸してつま先が砂に埋もれていくのを楽しんでいるあなたを見ていると、何故か自分が飢えているようで動揺する。

きっと喉が渴いてるんだ。

ジュースを自販機で買って戻ると彼女は海の中で転んでしまった。

支えてあげると小さく笑う。

ああそうか、僕は君が欲しかったんだ。

※

昔々王子様が小さなカエルをつかまえました。

王子様はこのカエルを家族のように愛しました。

ある日カエルは涙声で言いました。

「私にキスして」

王子様は微笑んでカエルの背中にキスをするとうカエルは女の子に。二人は結婚しました。

彼女の背中には今でもキスマークがあるとか.....。

※

こんなに暑い日は日差しの指先が私をじりじりと焼くから、日陰を探して歩くしかない。

ビルの影、街路樹の影、信号の影。

影踏みのように影を探す。

ああ向こうに大きな影がある。

それを目指して走る。

影に入ってほっと一息して見上げると、昔話に出てくる竜が日差しに焼かれていた。

※

楽観的に考えすぎだった。

めちゃくちゃ注目されてるよ俺！まさか通報されないよな...

待っていたら奴は赤の他人って顔して通り過ぎやがった！

「おい」

呼び止めるときつい瞳で俺を見上げる。

「何のご用ですか？」

「今日誕生日だろ？」

花束を渡したら

「嫌がらせ？」

だと。可愛くない！

※

向かいの家の庭には季節ごとにいろんな花が咲く。

赤の他人の家ながら足を止める人たちに、いいでしょう、素敵でしょうと話しかけたくなる。

それに比べ家には紫露草の小さい花しかない。

ある日向かいの家の人に話しかけられた。

「紫露草素敵ですね」

紫露草が自慢げに背すじを伸ばす。

※

ふっと彼の匂いがした。

人混みの中だということにかぎ分けられるなんて我ながらすごいと苦笑する。

超遠距離恋愛中の彼の鎖骨、その上にちょっとだけ付ける香水は爽やかだけど苦かったなあ。

ああ……涙、出ないで。

帰ってくるまで泣かないって約束したから。

今頃彼は火星に向かう船の中。

※

早朝見た夢は悲しい夢だった。

大好きな人に大嫌いと言き捨てる夢。そんなつもりなかったのに。

行ってしまう背中を追いつがることも出来なくて胸が張り裂けそうに熱くて泣けてきて行かないでと言えなくて、布団をはねのけて起きた。

びっしょり汗を掻いて、あれは誰だったのかと考える。

※

テスト前の息抜きでベタなデートコースを予定して駅で待ち合わせした。

私服の君はすごくかわいくて気後れしていたら、

「行こう行こう」

と手を繋いで指先絡める。

横見ると照れた顔がかわいくて、わあ～幸せだなんて思ったら、彼女から力が抜けて自然にほどけた。

目の前に担任の怖い顔。

深海に爪先をひたして一息。

私が抱える星は暗闇の中まだ瞬いている。

月が通りすぎながら

「その星ちょうだい」

とおねだりするので断ると彼女は微笑みながらふんわり通り過ぎていった。

太陽が向こうから眩しい顔をだした。

「おはよう」

私は星達に語りかける。

「皆さん、良い一日を」

※

昼休みの購買ダッシュに負けた者には空腹地獄が待っている。

四時間目が終わった直後扉を飛び出し、踊り場コーナーで制服を翻し階段を一気に駆け下りる

。でも購買は既に来ていた人達が誰にも渡さない勢い。

「.....どうしよう」

涙声で呟くと

「やる」

先輩の声と一緒にパンが降ってきた。

※

冷たい牛乳を腰に手を当てて喉を鳴らしながら飲む彼女を裸のまま見つめていた。

「ぷっは〜！」

飲み終えて一息つく姿がオトコらしい。現実にそれやる人いるんだな...

二人きりの旅行で部屋付きの温泉でこのためだけに牛乳を買ってでも。

「牛乳好きなんだ」

彼女の唇はミルクの味がした。

※

「春はあけぼの」

と娘が音読を始めた。今は5年生でも古文を習うのね。

つかえながら読む娘に寄り添いながら、自分がこの話を習ったのは中学生だったことを思い出した。

実力テストの出来に悩んだり、恋の話で盛り上がった平和な時。

「お母さん聞ってる？」

あなたにも来るのね。

※

先程まで咲き誇っていた薄い桜色が唇を寄せると若々しい緑が芽吹く。

緑は暑くなるごと濃くなり生きることを謳歌する。

大きな嵐が連れてきた寒い風が赤や橙色に色づき艶やかに山を飾るが、雪が茶と灰色の季節を運んできて山は静かに春を待つ。

山の案内人は「人生に似ている」と微笑む。

※

海にぷかぷか浮いていれば嫌なことはみんな波が持って行く。

もうこのままずっと浮いていようかと思ったその時、浅瀬を走る音がしてぐいっと手をつかまれ起こされた。

「死んでいるかと」

彼は泣きそうな顔。そんな顔して抱擁されたら困る。

敏感に浮気を察知したことを問いただせない。

※

「前世で一緒だった彼の胸元にはさ、星形のアザがあってね。真夜中に必ず迎えに来るっていつとったんや！」

夢見がちに話すが、真夜中に来るってど一ゆ一ことかわかっとなのか？

「誰？そいつ。ほんまに来るんか」

「来るって！」

嬉しそうに言うから俺の胸元は暫く見せてやんねえ。

※

真っ昼間の屋上に誰も来ないからって壁にもたれて眠っている先輩。

その唇に自分の唇で触れても眠ったまま。

急な突風でスカートから足がのぞいても続く健やかな寝息に心がざわつく。

「食べて良いデスか？」

君の前にいるのは健全な狼ですよ？

骨まで食べちゃいますよ？

悪気なしで。